

有島武郎 「或る女」

20世紀になったばかりの世界を背景にした小説「或る女」は、実際のモデル人物を借りたフィクションを通じて、ひとりの近代女性の生の悲喜劇をみごとに表出しました。作家の有島武郎は、白樺派の作家として明治の後半から大正期に活躍します。そして、この「或る女」は、人道主義的な立場の作家とされる彼の代表作とされています。ここでは、「或る女」の主人公がアメリカに向かう場面を取り上げて、アメリカという外国が20世紀初頭にどのようなイメージで表現されていたのかを、Lessonを通して確認していくことにします。つまり、「アメリカ」という文化的な異質さを、この物語がどのように組み込んでいたのかをLessonで知り、そこから、この小説の読みのひとつの方法を手にもしてもらいたいのです。

主人公である早月^{さつき}葉子は、アメリカでの生活に自分の可能性を夢見ていろいろと期待します。「これから行こうとする米国という土地の生活」も、ひとりでいろいろと想像しないではいられなかった。葉子は、「女のチャームというものが、習慣的な^{きずな}絆から解き放されて、その力だけに働く事の出来る生活が

そこにはあるに違いない」(十一)と思います。アメリカ社会で葉子が想像する、この「女のチャームというものが」「その力だけに働く事の出来る生活」は、さらに言葉を重ねるように幾度も言い換えられます。次のLessonで取り上げる箇所は、やや具体的な表現にはなっていますが、葉子の空想はまだまだ抽象的なものでした。

 • Lesson 1

近代日本社会には欠けていたものでもある、葉子のアメリカ生活に対する期待はどのようなものでしょうか。空欄(A)、(B)、(C)に適切な語句をそれぞれのa、b、cの選択肢から選び、小説の表現を完成させなさい。

「(A) さえあれば女でも男の手を借りずに (B) 事の出来る生活がそこにはあるに違いない。(略) 少なくとも (C) 社会のどこかではそんな生活が女に許されているに違いない。葉子はそんな事を空想」します。

- A a 語学力とユーモア b コネと度胸
 c 才能と力量